

画家とアーカイブズの関係についての 覚え書き

パウル・クレーを事例として

A Note of the Relationship between Artist and Archives: In the Case of Paul Klee

渡邊美喜 | Miki Watanabe

| アート・アーカイブズ | 個人アーカイブズ | パウル・クレー | パウル・クレー・センター |
Art Archives / Personal Archives / Paul Klee / Zentrum Paul Klee, Bern

アートに関わるアーカイブズと一口に言っても、その範囲は広汎である。本稿では、一人の画家とその人物に関わるアーカイブズを考察することによって、アート・アーカイブズの一例を提示した。まず、アートの世界ではアーカイブズがいかに認識されているかを専門事典『マクミラン社 グローヴ世界美術大事典』(*The Grove Dictionary of Art*)に見る。そして具体的事例としてパウル・クレー(1879-1940)を取り上げ、彼にまつわるアーカイブズとは何かを考える。その際、アーカイブズの2つの面、すなわち資料群とそうした資料を管理する組織の両者を切り離して整理する。さらに、パウル・クレーのアーカイブズを先に挙げた文献に示されるアート・アーカイブズの類型と照らし合わせる。パウル・クレーに関わるアーカイブズ組織は、現在設立されて半世紀以上経つ。その蓄積をも含んだものが今日、パウル・クレーに関わるアーカイブズ資料と見なされる。

The idea of art archives is too broad to understand. This paper will discuss the archives of Paul Klee (1879-1940) as an example of art archives. First, based on the categories of art archives as outlined by *The Grove Dictionary of Art*, the details of Klee's archival objects and the institution holding them will be mentioned. The Zentrum Paul Klee in Bern, Switzerland, has studied Klee for a while, and holds works of art as well as Klee's archival objects. Through accumulations of its predecessor, the Zentrum Paul Klee has become the center of Klee study, and, furthermore, has enriched the archives of the artist himself.

1 — はじめに

アートに関わるアーカイブズと一口に言っても、その範囲は広汎である。本稿では、一人の画家とその人物に関わるアーカイブズを考察することによって、アート・アーカイブズの一例を提示する。

まず、アートの世界ではアーカイブズがいかに認識されているかを専門事典に見る。そして具体的事例としてパウル・クレー (Paul Klee, 1879-1940) を取り上げ、彼にまつわるアーカイブズとは何かを考える。その際、アーカイブズの2つの面、すなわち資料群とそうした資料を管理する組織の両者を切り離して整理する。さらに、パウル・クレーのアーカイブズを先に挙げた事典に示されるアート・アーカイブズの類型と照らし合わせる。このように検証を重ねることによって、個人に関わるアート・アーカイブズの具体的な像と、それを管理する組織に求められる役割は何であるのかを考察する。

なお、アート(Art)の訳語としては、芸術、美術などがあり、芸術は美術の上位概念となる。慣用的に Art を美術と表す場面もあるが、本稿での Art は美術だけにとどまらず、建築をも視野に入れた領域を意図し、これを「アート」と呼ぶ。しかしながら、Art を芸術と解した場合、そこには音楽、文学、映画、演劇、舞踊なども含まれよう。こうした領域にも、以下に登場するアート・アーカイブズの類型は援用できるのかもしれないが、本稿では考慮の対象外とする。また断りのない限り、本文中で「クレー」と記した場合は、パウル・クレーを指すものとする。

2 — アート界におけるアーカイブズの認識とアート・アーカイブズの類型

はじめに、アートの世界におけるアーカイブズの認識を確認する。そこで用いるのは、アートの専門事典にあるアーカイブズの定義である。

グローヴ・アート・オンライン(以下 GAO と表記する)は、オックスフォード大学出版局によるオックスフォード・アート・オンラインで提供され^[1]、その母体の一つとなっているのが『マクミラン社グローヴ世界美術大事典』(*The Grove Dictionary of Art*)である^[2]。これは定評のある参考図書であり、冊子体としては34巻から成る。1996年に刊行され、その見出し語は45,000以上にも及び、日本からも多くが執筆に参加している。

その項目の一つに、「アーカイブズ(Archives)」がある^[3]。冒頭、GAOではアーカイブズをオリジナルの記録のコレクションであると定義する。そしてアート・アーカイブズとはアートに関わる多様な所蔵機関と刊行物に及ぶものとし、以下の6つの類型に分ける。

1 — Oxford University Press. "About Grove Art Online", Oxford Art Online. <http://www.oxfordartonline.com/public/book/oaogao> (入手2012年9月30日)

2 — Jane Turner ed., *The Dictionary of Art*, Macmillan; Grove's Dictionaries, 1996, 34 vols. 邦題は同書が刊行された時、日本で編集された解説書(松永尚子編『The Dictionary of Art: マクミラン社グローヴ世界美術大事典スタンディガイド』、ネイチャー・ジャパン株式会社: マクミラン社グローヴ世界美術大事典日本事務所、1996)に基づく。

3 — Oxford University Press. "Archives", Oxford Art Online (入手2012年9月30日)。ただし閲覧できるのは、購読者のみである。冊子体では、Antje B. Lemke; Deirdre C. Stam, "Archives". *The Dictionary of Art*, vol. 2. Jane Turner ed., Macmillan, Grove's Dictionaries, 1996, pp. 363-372. この一項目は刊行に先立ち、日本語訳が雑誌に掲載された(アントジェ B. レムケ: デェアドレ C. スタム「アート・アーカイブズ」、水谷長志: 中村節子訳「アートドキュメンテーション研究」4号、1995年、47-68頁)。さらには、『情報管理』(39巻2号、1996年、101-123頁)に転載される。ただし、訳者が執筆者から提供された英文と冊子体、あるいは現在グローヴ・アート・オンラインでの記載には、表現の差異があるように推測される。そこで本稿は、翻訳版を参照しながらも、オンライン版を底本とした。

4 — 注3で示したオンライン版と冊子体での類型の説明文の対比による。

5 — 寺門臨太郎編「展覧会歴(日本国内)」、「パウル・クレーの芸術」、愛知県美術館・山口県立美術館編、愛知県美術館・中日新聞社、1993年、347-348頁

6 — 「パウル・クレー おわらないアトリエ」展(会場:京都市立近代美術館、会期:2011年3月12日-5月15日;会場:東京国立近代美術館、会期:2011年5月31日-7月31日)。2会場共通の協力団体に、パウル・クレー・センター(ベルン)がある。展覧会の新聞評では、「やや玄人好みの構成だが、画家の行為の謎解きに参加するような面白さは堪能できる」と記された(岸桂子「展覧会パウル・クレー おわらないアトリエ 思索の跡たどる構成」、『毎日新聞夕刊』、2011年7月19日、4頁)。この展覧会は絵画作品、アトリエ写真、カタログ・レゾネなど、クレーとそのアーカイブズ資料について示唆に富む。

- 1. アートに関わる個人と組織についてのオリジナルの記録をもつアーカイブズ
- 2. オリジナルのアート作品のコレクション
- 3. 参照や教育を主たる目的として収集されたアート作品の写真、版画、マイクロフィルムのコレクション
- 4. あらゆる種類の視覚的な画像による商業的なアーカイブズ
- 5. 芸術家や建築家によるオリジナルの文書や素描、そして絶版となった挿絵本を公刊したコレクション
- 6. 誌名に「アーカイブズ」をもつ雑誌

事典が刊行されたのが1990年代半ばのことであり、上記の類型にはデジタル媒体によるものへの目配りはない。項目によってはGAOのオンライン版の内容が更新され、冊子体とは記述が異なることもある。しかしながらこの項においては、冊子体とインターネットでの公開版との差異はない[4]。恐らく現時点でアート・アーカイブズを考えるならば、デジタルを媒体とするものは必ずや言及されることだろう。しかしながら本稿では、1990年代に書かれたアート・アーカイブズの類型は今日にも通用するものと見なし、GAOに表れる6つの類型そのままを用いる。

3 — パウル・クレーの生涯

ではアート・アーカイブズの一例として、パウル・クレーにまつわるアーカイブズを検証する。はじめにクレーとはどういう人物であったのか、その生涯を追う。

パウル・クレーは1879年、スイスのベルン近郊のミュンヘンブーフゼーに生まれた。3歳違いの姉がおり、ドイツ人である父は音楽教師、スイス人の母はオペラ歌手という音楽一家のもとで育つ。クレー自身も音楽の才をもち、バイオリンを習い、わずか10歳にしてベルン市の管弦楽団の非常勤団員となる。一方、描く才能も発揮し、画家を志して1898年にミュンヘンに旅立つ。私生活でのクレーは、1906年にピアニストであったリリー・シュトゥンプフと結婚、以後、生活の拠点をドイツに置く。30歳の時には初めてとなる個展をベルンで開催するが、画家としては不遇の生活を送る。収入は妻のピアノ教授に頼り、主夫となって結婚の翌年に誕生した一人息子フェリックスの子育てを行う。1914年にアウグスト・マッケらとともにチュニジアを旅したことが、その色彩表現に大きな影響を及ぼす。

転機となったのは、バウハウスへの招聘である。バウハウスとは、近代のデザインと建築に大きな影響を及ぼしたドイツ国立の総合造形学校であり、1919年に開校した。クレーは1921年より10年間教壇に立ち、1931年にバウハウスを辞職、同年デュッセルドルフ美術アカデミーへと転出した。ナチスがドイツの政権を掌握した1933年、クレーは生地ベルンへと逃れる。ドイツ国内では、1937

年の「頽廃美術展」にその作が展示され、公立美術館に所蔵される100点余りがナチス政府により押収された。

晩年、クレーは病に苦しみながらも、最後まで旺盛な制作活動を行う。そして1940年、スイス南部の療養所で死去する。かねてから申請していたスイスの市民権が得られたのは、没後一週間足らずのことであった。1940年という年はクレー家にとって、悲しみと喜びの一年となる。1月、画家の父が91歳で大往生をとり、6月に画家が60歳で死去した。そして年末には画家にとっての初孫が誕生し、その顔を見ることはできなかった。

クレー作品が日本で公開されたのは、クレー存命中の1920年代にさかのぼる[5]。個展は1958年にブリヂストン美術館で初めて開催されて以来、その規模は大小さまざまであるが何度となく行われ、日本での人気も高い。近年では2011年に、「パウル・クレー おわらないアトリエ」展が開かれている[6]。

以降、パウル・クレーのアーカイブズを具体的に検討する。アーカイブズは、資料群、あるいはそれを管理する組織など、いくつかの語義をもつ。そこで、まず資料群としてのアーカイブズを整理し、組織としてのアーカイブズを次に見る。

4 — 資料群としてのアーカイブズ

クレーは画家でありながら、ものを書くことにも熱心であった。著作を「クレーが何らかの形で書き残したもの」と位置づけた著作解題では、日記、手紙、出版物、講義録、詩、草稿の6つに分類している[7]。以下、解題での分類にいう日記、手紙、講義録、さらにはGAOに言及されるアート・アーカイブズの類型をも考慮に入れて、クレーに関わる資料群としてのアーカイブズを考える。

日記は、4冊のノートが残る[8]。1898年から1918年に渡って、断続的につけられていたものである。およそ20年間のことであり、クレーの全生涯に及ぶものではない。その日記で特徴的であるのが、区切りごとに番号を付していたことであり、その数は欠落があるものの1,134に達する。筆者自身が日記を編集していた痕跡が見られ、下書きとその清書という複数の版があり、メモ書きが貼付されているところもある。

手紙は、家族のみならず、友人、画商に宛てたもの、さらには事務的なものもある[9]。存在が確認されるものの中では、家族への書簡が圧倒的に多い。家族に宛てた私信のうち、現存する一番古いものは1893年7月、13歳の時のものである。夏休み中、旅先のクレーからその父ハンスへと書かれている。

講義録は、教育者としてのクレーの産物である[10]。前述の通りクレーは1921年からバウハウスで教鞭をとり、担当したのは「基礎的造形論」講座であった。きちんとしたノートの体裁をとっているものは、1921年から23年にかけての1冊に過

7—— 拜戸雅彦編「クレーの著作解題」、前掲5)、320-325頁。これは個々の分類に関して、構成と特徴、出版経緯などを記す。以下本文で触れるアーカイブズ資料については、別に掲げる文献の他、この一文も参考した。

8—— 日記については、パウル・クレー『クレーの日記』、南原実訳、新潮社、1961年、ならびにパウル・クレー『新版 クレーの日記』、W. ケルステン編、高橋文子訳、みすず書房、2009年を参照した。

9—— 手紙については、『クレーの手紙』、南原実訳、新潮社、1989年による。この原本は、Paul Klee; herausgegeben von Felix Klee, *Briefe an die Familie: 1893-1940*, DuMont, 1979. 原題が「家族に宛てた手紙」と記される通り、取められているのは画家の両親、姉、妻、息子とその妻に宛てたもののみである。ただし、邦訳されているのは原本の3分の1程度に過ぎない。

10—— 講義録については、パウル・クレー『造形思考』、土方定一；菊盛英夫；坂崎乙郎訳、新潮社、1973年ならびにパウル・クレー『パウル・クレー手稿 造形理論ノート』、西田秀穂；松崎俊之訳、美術公論社、1988年を参照した。クレーは1925年に *Pädagogisches Skizzenbuch (Bauhausbücher Band 2)*, Albert Langen Verlag. を刊行している(邦訳は、パウル・クレー『教育スケッチブック』、利光功訳、中央公論美術出版、1991年(バウハウス叢書2))。これはクレーの生前、著作としては唯一となる単行書で、副題には「ヴァイマルの国立バウハウスにおける理論の授業についての原案」とある。スケッチブックと題されるように、文字のみならず画家の手によるスケッチがちりばめられ、文章と図、その両者がともに重要である。刊行にあたっては、バウハウスの同僚であったモホイ・ナジラー・スローがレイアウトを行った。

11 — 作品総目録については、フェリックス・クレー「作品総目録」、『パウル・クレー』、矢内原伊作；土肥美夫訳、みすず書房、1962年、201-204頁とChristian Rümelin, 'Notes on the Catalogue raisonné', *Paul Klee catalogue raisonné*, vol. 1. Paul Klee Foundation; Museum of Fine Arts, Bern ed., Thames and Hudson, 1998, pp. 19-32. による。『パウル・クレー』は副題に「遺稿・未発表書簡・写真の資料による画家の生涯と作品」と記される通り、アーカイブズ資料を豊富に用いて、クレーの生涯をたどるものである。

12 — ヴォルフガング・ケルステン「油彩転写素描」、池田祐子訳、『パウル・クレー おわらないアトリエ』、池田祐子；三輪健仁編、日本経済新聞社、2011年、114-121頁。2011年の展覧会ではクレーの作品の成り立ちに着目し、「プロセス1 | 写して/塗って/写して || 油彩転写の作品」「プロセス2 | 切って/回して/貼って || 切断・再構成の作品」「プロセス3 | 切って/分けて/貼って || 切断・分離の作品」などの章が設けられた。この他、画家の創作の過程を知る道具として、写真が取り上げられる。クレーのアトリエを写した写真は、未完成作品の作業風景を示すばかりではなく、そのアトリエの様子はクレー自身が演じたものと指摘される。ヴォルフガング・ケルステン「アトリエ絵画」、池田祐子訳、同前書、36-40頁。ならびに池田祐子「ミュンヘンのアトリエ写真」、同書、76-81頁。を参照。

13 — herausgegeben von Felix Klee, *Tagebücher von Paul Klee*, Verlag M. Dumont Schauberg, 1957. 1961年刊行の邦訳については注8参照。

14 — Paul Klee, *Tagebücher, 1898-1918. Textkritische Neuedition*, herausgegeben von der Paul-Klee-Stiftung, Kunstmuseum Bern, bearbeitet von Wolfgang Kersten, 1988. 2009年刊行の邦訳については注8参照。

ぎないが、この他断片的なメモがおおよそ3,000点残る。

以上の3つが、著作解題の分類に掲げられていたものである。この他にも、クレーに関わるアーカイブズ資料がある。まず自身の作について手控えとなる作品総目録を、1911年からクレーは丹念に付けている[11]。画家は年ごとに通し番号を付け、作品の題名と大よその技法を記す。作品総目録ではあるが、画家自身が登録するに値すると認めた作品のみを記載するという方針をもつ。そのため、作品すべてが必ずしも記載されるわけではなく、習作や若年期の作などはその意思により除外されることもある。作品総目録に登録される作が8,918点あるほか、息子フェリックスの集計によると、クレーが記さなかった作が228点ある。目録の最初に掲げられているのは、1883年の5歳にもならない時の作とされ、5点ある。作品総目録は全部で12冊あり、最初期の1冊は1883年から1918年を対象としている。第一次世界大戦の戦禍により失われることを恐れて、クレーはこれの複写版を作成させた。しかしながら、その複写版は1917年までを範囲としており、完全なる複製物とはなっていない。

またクレーの場合、その絵画作品もアーカイブズ資料と見なすことができる。1916年から3年間の従軍期間の中で、クレーは航空学校での作業に従事した。そこで型紙を用いた軍用機の塗装転写技術を学び、後年それを応用した油彩転写という新たな技法による作品を作る[12]。さらにはある作品を元に、それを切り、向きを変え、そして組み合わせ、貼るなどして、クレー自身による再構成の作業を経た作品を生み出す。こうした作品を詳細に検証することにより、画家の創作の痕跡を見取ることができる。

これまで見てきたクレーのアーカイブズ資料の多くは公刊され、日本語への翻訳も多い(表参照)。なかでも日記と講義録は、編者が異なるものが複数刊行される。

日記の場合1957年に、息子フェリックスが編集したものが刊行された[13]。編者あとがきでフェリックスは、出版をもちかけられたのが1955年であると記す。刊行までに2年を要したが、クレー没後、まだ20年たらずという時期である。そこで日記そのものでは名が記されているにも関わらず、存命の知人に配慮して頭文字だけにして表、名前が伏せられるところがあった。また、編集最中に発見された日記のメモ書を該当する年代のところに挿入する。こうした編集上の改変が示されないままに出版されたため、学術的研究の妨げとなると批判がなされるようになる。そこで1988年にパウル・クレー財団が編集を担った新版が成る[14]。4冊のノートに記された日記がそのまま書き起こされ、その時々で異なるインクの色にも言及される。クレー自身が省略していない限り、人名も明らかにされた。さらには同一のノートの中で順を追わずに書き継がれていた時期もある、クレーによる日記の成立研究への底本ともなるように企画された。

日記よりも複雑な経緯をたどるのが講義録である。クレーの死後、未亡人リリーとともに画家ユルク・シュピラーが遺稿の整理を行った。彼の手により1956年に

刊行されたもの[15]は、シュピラーの理解に基づき断片的なメモ類ばかりでなく、ノートをも解体するようにして再構成されたものであった。そのためクレー自身の思考の発展のさまを無視したものとして批判を受けた。次に1970年に出たものも同じくシュピラーを編者とはしているが、その恣意的な解釈は少なくなったと評価される[16]。さらにはクレー生誕100年を機として、1979年に編者をパウル・クレー財団とするファクシミリ版が出版された[17]。冒頭、「造形的形態理論のために」と講義題目が記されたノート1冊が、画家による文章と図との有機的な関係そのままに忠実に再現されている。ノートの大半は、1921年から22年にかけて行われた冬学期の9回の講義が占める。つづけて1922年夏学期の講義のための補充メモ、さらには22年から23年にかけての冬学期の講義が記されている。

また、アーカイブズ資料そのものを公刊したものではないが、それを基盤として生まれたのがカタログ・レゾネである。このレゾネはパウル・クレー財団の編集による9巻本であり、刊行は1998年より世紀をまたいだ大プロジェクトとなった[18]。上述の通りクレー自作の作品総目録では8,918点を数えているが、カタログ・レゾネにおいては9,418点とされる[19]。両者の数字を単純に比較するならば、レゾネに掲載される作品のうち、自作の目録にも登録されていたのは95パーセントにのぼる。この高い割合は、画家自身が包括的な作品総目録を作成していたことの証拠といえよう。

カタログ・レゾネで、個々の作品について掲載される事項は以下の通りである。

- カタログ番号
- タイトル(主要タイトル、英文タイトル、異名)
- 制作年
- 作品番号
- 自作の作品総目録にある技法ノート
- 技法(メディア、支持体、装丁の状況)
- 寸法
- 署名
- 画家とその妻による書き込み
- 状態
- 来歴
- 所蔵先
- 画家自身による作品への言及
- 参考文献
- 展覧会歴
- オークション記録
- 参照

15 — Paul Klee, *Das bildnerische Denken*, Benno Schwabe & Co. Verlag, 1956. 1973年刊行の邦訳については注10参照。

16 — Paul Klee, *Unendliche Naturgeschichte*, Schwabe & Co. Verlag, 1970. 邦訳は「パウル・クレー：無限の造形」、南原実訳、新潮社、1981年。

17 — Paul Klee, *Beiträge zur bildnerischen Formlehre. Faksimilierte des Originalmanuskripts und Transkription von Jürgen Glaesemar*, Schwabe & Co. Ltd., 1979. 1988年刊行の邦訳については注10参照。

18 — ドイツ語版と英語版の2種が同時に刊行される。目録などレゾネの主要な部分はドイツ語によって表記され、これは英語版も同様である。英語版は、序文やカタログ・レゾネに関する断り書き、用語集などが英文である。本稿では英語版を参照した。Paul Klee Foundation; Museum of Fine Arts, Bern ed., *Paul Klee catalogue raisonné*, Thames and Hudson, 1998-2004, 9 vols. 以下、カタログ・レゾネについては、主として第1巻を参照した。

19 — カタログ・レゾネ全9巻において連番により登録される作品数による。2004年に刊行された最終巻である9巻には、その巻末に補遺としてこれまでの8巻にある修整や新規発見された作などの追加分がある。本文ではそれらを考慮の対象とはしていない。

表——バウル・クレアの生涯とそのアーカイブズについての関連年表

	その生涯	家族の動き	アーカイブズ 資料の刊行(ドイツ語)	アーカイブズ 資料の邦訳刊行	アーカイブズ 組織の動き
1879年	12月18日、スイス・ベルン近郊の ミュンヘンブーフゼーに誕生				
1883年	自作の作品総目録で No.1と記される作品を制作				
1898年	4月より日記を付ける (第1の日記) 画家を志しミュンヘンの画塾に通う				
1901年	10月より翌年にかけて、イタリアに滞在 日記を付ける (第2の日記:10月から翌年5月まで)				
1902年	5月、ベルンに戻る 日記を付ける (第3の日記:6月から1916年3月まで)				
1906年	リリー・シュトゥンプフと結婚 ミュンヘンに移住				
1907年		長男フェリックス誕生			
1911年	作品総目録の作成を始める				
1912年	カンデンスキー、 マルクらの結成した 「青騎士」に参加				
1914年	チュニジアに旅行 第一次世界大戦勃発				
1916年	3月、ドイツ軍に徴兵される 日記を付ける (第4の日記:1916年3月から1918年末まで)				
1919年	兵役解除				
1921年	前年に招かれた ヴァイマル国立バウハウスで、 「基礎的造形論」講座を 受け持つ	母イダ死去			
1925年	ヴァイマル国立バウハウスの閉校により、 デッサウに移る 「バウハウス叢書2」として 『教育スケッチブック』刊行				
1931年	バウハウスを辞任 デュッセルドルフ美術アカデミーで 教授する				
1932年		フェリックス、 エフロシナ・グレジョウワと 結婚			
1933年	スイスに亡命				
1940年	6月29日、スイス南部 ロカルノ＝ムラルトの療養所で死去 7月、スイス市民権が与えられる	父ハンス死去 孫アレクサンダー (愛称アリオンシャ)誕生			
1946年		妻リリー死去			クレア協会設立
1947年					バウル・クレア財団設立
1948年		フェリックス一家、 スイスに帰国			バウル・クレア財団、 ベルン美術館内に 置かれる
1952年					フェリックスが ³ バウル・クレアの 著作相続権を 主張した裁判の結果、 クレア協会解散

その生涯	家族の動き	アーカイブズ資料の刊行(ドイツ語)	アーカイブズ資料の邦訳刊行	アーカイブズ組織の動き
1956年		ユルク・シュビラー編集による講義録A1[注15]		
1957年		フェリックス編集による日記B1[注13]		
1960年		フェリックス編集による『クレール詩集』I フェリックス・クレール著 『パウルクレー』II		
1961年			1957年版に基づく日記B1[注8]	
1962年			フェリックス・クレール著 『パウルクレー』[注11] (1960年刊の邦訳)	
1963年	フェリックス、 パウルクレー財団理事長に就任 (1990年まで)			
1970年		シュビラー編集による講義録A2[注16]		
1973年			1956年版に基づく講義録A1[注10]	
1977年	エフロシナ死去			
1979年		フェリックス編集による手紙[注9] パウルクレー財団編集による講義録A3[注17]		
1980年	フェリックス、リヴィア・マイヤーと再婚			
1981年			1970年版に基づく講義録A2[注16]	
1988年		パウルクレー財団編集による日記B2[注14]	1979年版に基づく講義録A3[注10]	
1989年			1979年刊の手紙の部分訳[注9]	
1990年	フェリックス死去 アレクサンダー、 パウルクレー財団理事長に就任			
1998年		パウルクレー財団編集によるカタログ・レゾネ9巻本刊行開始(2004年まで)[注18]		
2004年			『クレールの詩』III	パウルクレー財団解散
2005年				パウルクレー・センター設立
2009年			1988年版に基づく日記B2[注8]	

[凡例]

パウルクレーとその家族の生涯、アーカイブズ資料の刊行(ドイツ語、邦訳)、そしてアーカイブズ組織の動きを一表にした。

アーカイブズ資料の刊行は、本文で言及されるものを中心とし、その全てを網羅するものではない。

編者が異なって数度刊行された講義録と日記は、略号としてA(講義録)、B(日記)を用い、数字は刊行の順を示す。

刊行されたアーカイブズ資料の書誌については、本文中の注に記載される場合はその番号を示し、それ以外の3点については枠内ではローマ数字で表し、以下に詳細を記す。

(I) Paul Klee; herausgegeben von Felix Klee, *Gedichte*, Die Arche, 1960

(II) Felix Klee, *Paul Klee: Leben und Werk in Dokumenten, ausgewählt aus den nachgelassenen Aufzeichnungen und den unveröffentlichten Briefen*, Diogenes, 1960

(III) パウルクレー 『クレールの詩』、高橋文子訳、平凡社、2004年

20 — Josef Helfenstein, 'Preface', *Paul Klee catalogue raisonné*, vol. 1. 前掲11), pp. 12-13.

21 — 主として, *Zentrum Paul Klee, Bern*, Hatje Cantz, c. 2005. を参照した。同書は、パウル・クレー・センターの開設記念の展覧会に合わせて、刊行されたものである。

22 — クレーの作品選別については、ケルステン「特別クラス」、柿沼万里江訳、前掲12)、372-380頁参照。

クレーと同時代を生きた他の画家のカタログ・レゾネと比較した時、油彩、版画といった技法別に編まれることが多いのに対し、クレーの場合は編年体である[20]。これは、画家自作の作品総目録を基盤として、カタログ・レゾネが編纂されたことによる。さらには、作品番号と技法ノートという、自作の作品総目録に依拠する情報をもつ。先述の通り、クレー自筆の作品総目録には、自らの意図で登録しない作品もあり、その場合はこうした項目は省かれる。参照という項目は、クレー自身による作品同士の相関関係を示す他、挿絵として描かれた場合は文学作品などを記す。

こうしたクレーにまつわるアーカイブズ資料からは、その人物像をうかがい知ることができる。創作者としてだけでなく、教育者といった公的な顔、その一方で自身の両親、妻、息子らに宛てた私信などからは、私的な姿も伝わってこよう。

5 — 資料を管理する組織としてのアーカイブズ

今日、パウル・クレーのアーカイブズ資料を管理する組織として、パウル・クレー・センター (Zentrum Paul Klee) がある。クレーが誕生し、現在眠るベルンに位置し、2005年に開設された。以下、1940年の画家の死後、クレーのアーカイブズ資料が管理されてきた経緯と、開設から7年を迎えるパウル・クレー・センターが果たそうとする役割について考察する[21]。

パウル・クレーが死去した時、手元にあった作品の数はおよそ6,000点である。ここには、生前から遺産コレクションの形成を目的として、「特別クラス」「非売」「自分へ」「リリーへ」「遺産コレクションのために指定」などと、画家自身が選別した作品が多く含まれていた[22]。妻リリーは夫の遺志を尊重しながら、作品の売却益を得ることで生活をする。一方、一人息子のフェリックスはドイツ兵として戦地にあり、1945年に第二次世界大戦終結となっても連絡がつかないままであった。そうした中、リリーの相談役を務めたのが、夫妻の古くからの友人であったロルフ・ビュルギである。

1946年9月22日にリリーは死去する。その2日後、ビュルギは他の3人と共同してクレー協会 (Klee-Gesellschaft) を設立、パウル・クレーの遺産を所有する受け皿となった。これはワシントン協定 (Washington Agreement) に基づく、連合国による財産の押収、清算への対抗措置であった。さらにはベルン州の教育長の助言を受けて、協会は1947年にパウル・クレー財団 (Paul-Klee-Stiftung) を設ける。その翌年クレー協会とベルン美術館との間で、財団を美術館内に置くことと財団が管理するクレー作品がベルン美術館に寄託されることが合意された。

リリーの没後、その相続人たるフェリックスが家族を伴いベルンに戻ったのは、1948年11月のことである。父パウル・クレーの遺産相続と著作相続権を主張し

て、フェリックスはクレー協会を相手取り裁判を起こす。フェリックスの主張が認められて、1952年末に裁判は決着した。その結果、クレー協会は解散し、パウル・クレー財団が存続する団体としてフェリックスとの間でクレーの遺産が分割された。

1952年12月に、パウル・クレー財団とフェリックス・クレーとの間で交わされた協定において、アーカイブズ資料は以下の通り規定される[23]。

- e パウル・クレーの現存せる書き物及び文庫に関しては次の如く協定される。
- aa 財団法人が所有する限りのパウル・クレーの書簡はフェリックス・クレー氏に引渡される。
- bb 日記、教育的遺稿、作品総目録は引続き財団法人に留める、文庫もそれがパウル・クレーの芸術的創造及び彼の人格の意義にとり重要なものである限り同様である。それに反し文庫が上述の意義をもたない限り、それは財団法人理事会との話し合いに基づきフェリックス・クレー氏に引渡される。(下線筆者)

文庫とあるのは、本稿でいうアーカイブズ資料と同義であろう。この一文をもってパウル・クレー財団と遺族との間での共通認識が明らかであり、創造者たるパウル・クレーの芸術的創造及びその人格の意義を尊重する。その一方、私的な性格をもつものとの線引きをしている。

最終的にはフェリックスは、財団に以下のアーカイブズ資料の所有権を認めている。

- 12部からなる作品目録
- 教育的遺稿
- 4部からなる日記

以来、所有権を回復したフェリックスは、手元に戻った父の作品を守り伝え、講演活動、またクレーに関する書籍の執筆、編集に熱心に取り組む。1990年にフェリックスが死去。その一人息子であるアレクサンダーは1992年、ベルン美術館長に対し、独立した施設としてのクレー美術館の設立を提案する。1995年、フェリックスの資産として管理されてきたクレー作品のコレクションは、フェリックスの妻と息子という2人へと分割された。妻リヴィアは自分の相続分を公的機関に寄贈することを希望していた。そしてフェリックスの死後、パウル・クレー財団への寄贈、寄託が以下のように行われる。

- 1997年 リヴィア・クレー 約700点寄贈

24 — 財団のベルン美術館からの分離は、クレール作品がベルン美術館から全く無くなったことを意味するわけではない。財団所有の2,600点あまりが新法人であるパウル・クレール・センターへと引き継がれた。現在でもベルン美術館は、『パルナツス山へ』(1932年)といったクレール作品を所有し、同館コレクションのハイライトの一つとなっている。またベルン美術館とパウル・クレール・センターとの協力関係は保たれている。

25 — クリスティーネ・ホプフェンガルト「アーカイヴ」、『パウル・クレール・センターベルン』、柿沼万里江訳、BNPパリパスイス財団：スイス美術研究所、2006年頃、119-123頁

— 1998年 アレクサンダー・クレール 約850点寄託

1952年の裁判の結着により、1940年のパウル・クレール、そして1946年の妻リリー・クレールの没後、画家遺族の手元に残されていた作品が、パウル・クレール財団と息子フェリックス・クレールへと二分された。1990年のフェリックスの死によりその遺産が2人へと細分される。しかしながら、それらが寄贈あるいは寄託されることで、財団がこれまで所持してきた作品およそ2,600点を含め、4,000点以上がパウル・クレール財団で一元的に管理されることとなった。先述のカタログ・レゾネに登録される作品数は9,000点余りであるので、財団が管理する作品はクレール全作品のほぼ40パーセントに相当する。一人の画家の作品が一カ所に集中する例は他にあまりなく、さらにはこうしたクレール作品の集約が、他の個人コレクションが財団に寄託される動きをもたらししている。

リヴィアの寄贈には一つの付帯条件があり、それは2006年までにパウル・クレールを専門とする美術館を公立の施設として設立することであった。これまでベルン美術館に同居していたパウル・クレール財団が、別場所で新たな施設、組織によって運営されることが具体化したのは、世界的な外科医ミューラー博士夫妻から土地と資金の支援を受けたことによる[24]。そして世界遺産に指定されるベルン旧市街を見下ろす高台の、画家の墓ともほど近い場所に建造となった。建物の設計は建築家レンゾ・ピアノによるもので、ベルンの観光資源の一つである。パウル・クレール財団は2004年末に発展的に解消し、2005年1月1日をもって新法人パウル・クレール・センターが誕生した。

パウル・クレール・センターでは、日記、講義録、作品総目録といったクレールのアーカイブズ資料を管理する他、近年整備されつつあるアーカイブズには以下のものがある[25]。

- 写真アーカイブズ
- 展覧会アーカイブズ
- ラジオ・テレビ報道アーカイブズ
- 音楽アーカイブズ
- 「クレールの生徒」プロジェクト
- 受容アーカイブズ

パウル・クレール・センターは、1947年以來の歴史をもつパウル・クレール財団の後継組織である。これまで述べてきた財団が所持するアーカイブズ資料やパウル・クレール財団の編纂物などは、長年の調査研究の蓄積に基づく。そして成熟の時を迎え、パウル・クレールという一人の人物の名を冠した組織ではあるが、一個人にとどまらず、広がりをもった活動を志す。

グローヴ・アート・オンラインでの
アート・アーカイブズの類型との対照

ここまで、パウル・クレーという一人の画家と、その人物に関わるアーカイブズを考察してきた。冒頭に挙げたGAOに示されるアート・アーカイブズの類型を考えた場合、該当するのは以下の通りである。

- 1. アートに関わる個人と組織についてのオリジナルの記録をもつアーカイブズ
- 2. オリジナルのアート作品のコレクション
- 3. 参照や教育を主たる目的として収集されたアート作品の写真、版画、マイクロフィルムのコレクション
- 5. 芸術家や建築家によるオリジナルの文書や素描、そして絶版となった挿絵本を公刊したコレクション

パウル・クレーという一人の人物のアーカイブズを考えた時、GAOに示される類型に合致するのは唯一ではない。ここまで本稿では、資料とそれを管理する組織という二者を区別してきた。始まりはパウル・クレーという一人の人物が残したアーカイブズ資料である。クレーのために設立された財団が半世紀以上の歴史をもつ今となっては、組織そのものの記録も蓄積されている。財団設立当初、主たる業務としていたのは、所蔵作品の公開とそれを保存管理することであった[26]。その目的が少しずつ果たされ、次なる目標を掲げたのは1970年代初めのことである。作品に関する記録、専門図書館、展覧会資料、写真資料といった、財団が収集整備するパウル・クレーについてのアーカイブズ資料が拡充されていく。アーカイブズ資料としての重要性は、画家本人が生み出したものの方が高いことは間違いない。一方、その量においては、財団によるものが勝っているのかもしれない。

画家が没してから60年以上経つと、その資料とそれを管理する組織、さらにはそれを取り巻く関係者ともに、時の経過を重ねる。第二次世界大戦直後という時代背景もあり、そのはじまりにおいては遺族と財団との関係は良好ではなかった。しかしながら現在は、画家本人を知る人はもはや存在せず、遺族も画家の孫の世代へと移り変わっている。2005年のパウル・クレー・センターの発足で、パウル・クレーのアーカイブズ像は、新たなふくらみをもつ。

7 — むすびに

これまで見てきたように、パウル・クレーのアーカイブズ資料は、いみじくも「整理狂」

27 — 『パウル・クレー』(前掲11)、201頁
28 — 『クレーの手紙』(前掲9)、5頁
29 — 「文化往来 横尾忠則現代美術館、神戸に今秋開館」、「日本経済新聞」、2012年6月8日、40頁

[27]と息子が評したように、記録魔という側面も持つ人物の産物である。しかしながら、クレー幼少期の絵や手紙が、画家生誕から130年近く経つ現在も残っていることから、クレー本人だけではなく、その親が子の資料を大切にしてきたことがうかがえる。実際、息子の絵の才能に気付いた母親が、その資料を残したことが始まりである[28]。このように創造者たる当事者を中心として、その親と子に当たる三世代により、アーカイブズ資料が大切に保持されてきたパウル・クレーの例は、特異であるのかもしれない。

今日まで続くクレー評価の礎は、こうしたアーカイブズ資料が保管されるばかりでなく、活用されてきたことによるものである。クレーの場合、画家の生前より財団による作品管理が意図されていたこと、1950年代に息子とパウル・クレー財団とが交わした協定書の中でアーカイブズ資料の重要性が認識されたこと、そして息子を中心とした一連のアーカイブズ資料公刊の働きが、画家個人のアーカイブズ資料の存続とその活用に大きな役割を果たした。そして今、クレー家とパウル・クレー財団という両者のコレクションはパウル・クレー・センターという組織において集約され、クレーを媒介としたさらなる活動の広がりが期待される。

2012年、日本に芸術家個人の名前を冠する美術館が新たに誕生する。兵庫県立美術館は11月、その分館として横尾忠則現代美術館を開館させる[29]。1936年に兵庫県西脇市に生まれた横尾忠則は、80歳を目前とした今日もなお精神的に活動する現役の芸術家である。新美術館の設立は、2008年に兵庫県立美術館で横尾が個展を開催したことを機に、自身が所蔵している全作品の寄贈・寄託を兵庫県に申し出て、それが結実したものだという。横尾忠則の作品展示を主たる活動とする西脇市岡之山美術館が、すでに横尾の出生地である西脇市にある。この度、横尾忠則現代美術館に寄贈・寄託される作品は3,000点を数え、今後芸術家横尾忠則に関する一大センターとなることは間違いない。またアーカイブルームを設けることも計画される。

個人を主体とするアート・アーカイブズとはいえ、その個人にとどまらずいかに同時代の社会と関わっていたか、また個人を媒介としていかに広い世界へのつながりを見いだせるかが鍵となる。クレーの場合は、教鞭をとったバウハウスや音楽との関係性である。デザイナーとして出発した横尾忠則の場合、ポスター制作などを通じた社会とのつながりが、一つの切り口となるのかもしれない。また本稿で見てきたパウル・クレーという人物のアーカイブズ資料とそれに関わる組織は、半世紀以上の積み重ねによるものである。一朝一夕にしては到達し得ない、アーカイブズ資料とどのように取り組むのか、その大きな青写真が必要とされよう。